

アートを探求

AAC Journal

AICHI
ARTS
CENTER

by 愛知芸術文化センター

2026 SPRING

Vol. 127



ローザス

Rosas

Il Cimento dell'Armonia e dell'Inventione

イル・チメント・デッラルモニア・エ・デッラ・インヴェンツィオーネ

和声と創意の試み

2026年6月24日(水)

『Il Cimento dell'Armonia e dell'Inventione』/ 和声と創意の試み
アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル, ラドワン・ムリジガ / ローザス, アトラファイブ

場所/アノ芸術創造センター名古屋(名古屋市芸術創造センター) 時間/18:30~
料金/S席 8,000円 [S席U25] 4,000円、A席 6,000円 [A席U25] 3,000円
チケット/3月27日(金)10:00より一般発売

※[U25]は公演日に25歳以下対象(要証明書)。 ※未就学児入場不可。託児サービスあり(有料・要予約)。
※埼玉、東京公演あり。

詳細は
劇場WEBページで!



『Il Cimento dell'Armonia e dell'Inventione』/ 和声と創意の試み
江戸のアヴァンギャルド! 歌川国芳展
今、その道の向こうに 吉本作次
劇場と音楽 ハコとモノの現代音楽事情

ヴィヴァルディの名曲『四季』を ダンスで再構成!

2025年はアクラム・カーン・カンパニー、NDT 2と、世界の第一線で活躍するコンテンポラリー・ダンスを紹介し、多くの方々から賞賛を浴びた愛知県芸術劇場の海外招聘シリーズ。2026年6月には、ベルギー・ブリュッセルを拠点とする世界的ダンスカンパニー「ローザス」が登場します。これまでデビュー作『ローザス・ダンス・ローザス』、結成の契機となった幻の名作『ファーズーFase』といった初期作品から、マーラーの『大地の歌』(シェーンベルク編曲)をベースにした『3Abschied ドライアップシート(3つの別れ)』、ジョン・コルトレーンの名曲を題材にした『A Love Supreme~至上の愛』などの最新作まで、数々の話題作を上演してきました。

今回は約7年ぶりの愛知公演。同カンパニー芸術監督で、自然界の法則や社会的構造など多角的な視点から振付を行い、近年

は地球環境にも目を向け、環境に配慮した創作・上演を続けるアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルと、新進気鋭の若手振付家ラドワン・ムリジガによって2024年に発表された『Il Cimento dell' Armonia e dell' Inventione』/ 和声と創意の試みが、はやくも日本初上陸します。ヴィヴァルディの名曲『四季』に触発され、ダンスとして再構築された本作は、音楽と振付の精緻な呼応に加え、気候変動や自然破壊を主題としています。ケースマイケルの作品の特徴でもある音楽と身体がせめぎ合うスリリングなパフォーマンスを通して、舞台芸術の分野から「持続可能な社会の実現」という喫緊の社会課題や、自然や地球環境への眼差しを湛えた、新たな『四季』の魅力を提示する作品です。自然への連想を起点に、ダンスとしての応答を試みます。40年以上にわたりコンテンポラリー・ダンス界を牽引してきたダンスカンパニー「ローザス」の公演に、どうぞご期待ください。

愛知県芸術劇場

江戸のアヴァンギャルド!

うたがわくによし

歌川国芳(1797-1864)は、江戸後期に活躍した多くの浮世絵師たちの最後の世代に現れました。そして、多種多様な国芳の作品は、それまでの浮世絵になかった斬新な発想に基づき、浮世絵界に新風を吹き込んだのです。力強いポーズをとる英雄を大胆な構図と派手な色使いで描いた武者絵は、異色の魅力を放ち、国芳を一躍人気絵師に押し上げました。豊かな発想力は三枚続きの大画面を活かした大胆な武者絵や、西洋

画法を取り入れた風景画、市井の女性の日常を捉えた美人画、ウィットに富んだ戯画などに存分に発揮されています。

国芳の作品にみられる新奇な表現は、見る者を楽しませる魅力にあふれています。本展では、幅広い画題を手掛けた国芳の武者絵、戯画、美人画、風景画、役者絵に肉筆画も加えた約400件の作品を展示し、国芳の全貌に迫ります。

愛知県美術館 学芸員 由良渥



《相馬の古内裏》弘化2~3年(1845~46)頃 【通期展示】 個人蔵



スタッフのオススメ関連本!

ART LIBRARY

もっと知りたい歌川国芳
生涯と作品 改訂版(アート・ビギナーズ・コレクション)
恵俊彦/著 東京美術、2022(改訂版第一刷)

歌川国芳の主要作品を、140点もの鮮やかな図版とともに年齢ごとの変遷で辿る書籍。各図版に添えられた著者によるユーモア満載のキャッチコピーも楽しい。関連トピックも充実。

由良学芸員



2026年4月24日(金)~6月21日(日)

歌川国芳展——奇才絵師の魔力

場所/愛知県美術館

時間/10:00~17:00 ※金曜~20:00

(入場は閉館の30分前まで)

休館日/毎週月曜日(ただし5月4日[月・祝]は開館)、5月7日(木)

料金/一般1,800円(1,600円)、大学生1,000円(800円)、

高校生800円(600円)、中学生以下無料

※()内は前売券および20名以上の団体料金です。

会期中展示替えをします

【前期】4月24日(金)~5月24日(日)

【後期】5月26日(火)~6月21日(日)

詳細は
展覧会
特設サイトで!



劇場

NDT 2、若き精鋭たちの身体の威力

約20年ぶりのNDT 2来日公演は、甲乙つけ難い快作揃いのトリプルビルだった。

最初の作品はマルコス・モラウ振付『Folkå』。ダンサーたちの身体の威力にいきなり驚いた。鋼のようにぐわりとしなる上半身と、それを支える下半身の強靭さ。ブルガリアン・ヴォイスが響く闇の中、彼らはひとつの生命体のごとく凝集し、移動する。時に一人がころりと飛び出す、すぐにまた集団に回収される一連の動きが心に残る。あの一人は、集団から弱々しく転がり落ちたのか、それとも意志をもって逃げ出したのか。また、儀式性をまとった不気味なムーヴメント、民族紋様にも見える記号的なアームス、ユニゾンの張り詰めたシンクロナシティなどは、中高生など若い観客にも大いに刺さったようだった。

ストリートダンス出身の振付家、ボティス・セヴァの『Watch Ur Mouth』は内省的な作品だった。他者の声、自分の内なる声、立ち止まりたい、でも歩き続けたい……地を踏み鳴らし、拳を振り回し、踊ることでしか叫べない焦りや苦悩が、音楽とスPOークン・ワードの波に乗り切々と伝わってくる。本作はきっとストリートダンス由来のステップが詰まった激しい振付なのだろうと想像していたが、実際はむしろ静かな余白が印象に残った。舞台の上をひたすらに走り続けた一人のダンサーが、ついに息切れ、立ち止まった時、その身体を優しく抱き締める誰かが現れる。約25分のダンスの最後に待っていたものが愛だったことに、胸が温かくなった。

最後はアレクサンダー・エクマンによる『FIT』。舞台前方に横一列で並び、「コンニチハ!」と語り始めたダンサーたち

は皆揃いの白いチュチュを着ているが、そこに一人だけ青いチュチュとサングラスの“フィット(調和)していない人”が現れる。集団は不調和な個を注視し、責め立て、感化しようと試みる。不調和な個もまた集団を威嚇したり、感化しようと試みたり。しかし最後に全員チュチュを脱ぎ去ると、誰もがつんと肌色の個体になる。白とか青とか、フィットするとかしないとか言ったって、結局は皆同じ「人間」じゃないか、とでも言うように。そして人間たちが互いの調和・不調和に過敏に反応している横で、空間の一部とも異物ともつかぬままそこに置かれていた大きな石。あの石が、今も頭の隅から離れない。

阿部 さや子さん Sayako Abe
WEBメディア(パレエチャンネル)編集長。インタビュアー、ライター、編集者。イベントなどのプロデュースや司会、パレエ漫画の監修なども手がける。



『FIT』by Alexander Ekman(アレクサンダー・エクマン) © Rahi Rezvani

ネザールランド・ダンス・シアター (NDT 2) 来日公演2025

2025年11月21日(金)・22日(土) 場所/KAAT 神奈川芸術劇場(ホール)
2025年11月24日(月・休) 場所/愛知県芸術劇場 大ホール

愛知県芸術劇場ダンスアーティストのNullから 5月のパフォーマンスに向けてのメッセージ

5月の「劇場ワンダーランド」では、1年かけて創作してきた作品を上演します。試作段階から愛知の方々をはじめ、多くのおみなさまに見て育てていただいた作品で、愛知県で初演を迎えられることをとても楽しみにしています。今後は「からだであそんでみる」をモットーに、ワークショップや鑑賞イベントを通して、地域と深く関わってまいります。

Nullの『LIMBO』は5月2日(土)「劇場ワンダーランド」で上演される予定です。



© Joseph Marcinsky

特別整理休館のお知らせ

館内整理等のため**3月12日(木)～3月31日(火)**の期間は休館いたします。

それに伴い、**2月26日(木)～3月11日(水)**は
図書・楽譜あわせて**6冊まで**貸出できます。貸出期間も拡大します。

AACのWEBサイト・SNS・音声メディアでは、芸術を気軽に楽しめるコンテンツを配信!

AACタイム
by 愛知芸術文化センター



もっと知りたいアート専門の図書館
ART LIBRARY
(愛知芸術文化センター1F)

アートライブラリーでは、毎年、年度末に特別整理期間を設け、所蔵資料について所在や状態の確認・点検を行っています。作業の恩恵でさまざまな資料に触れるため、蔵書に対して理解が深まる時間でもあるんです!

鑑賞 note



心を揺さぶり、思考が巡る、その場でしか味わうことのできないもの。

丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

親しさと距離のあいまに

国際芸術祭「あいち2025」では、多様なバックグラウンドとつながる戦争や環境破壊など切実な問題意識を抱えた作品が並んでいた。私はその多くに意外なほどの「親しみ」を覚え、すこし戸惑った。当事者性を共感で回収してしまうことの軽慢さと暴力性を考える一方で、その感覚を掘り下げると、それらの作品に貫かれていたのが、祝祭性や高揚感よりも、日常に根差した感覚であったことに気づく。たとえば、食、器、家と故郷、それらと密接に結びつく土、大地、生態系、環境、自然。生の土台となる事物を起点とした、実直な感覚を浮かび上がらせる作品が印象に残った。

たとえばミルナ・バーミアによる《サワー・コード》および《ビター・シングス:オレンジの名のもとに》。吊り下げられた陶製の食物には骨のイメージが重なり、粘土で模られたオレンジとそれにまつわる物語の映像には、パレスチナの惨状が滲む。しかし同時に、土の確かな物質感や、現場である元厨房に染み込んでいた食事の匂いや気配が、食という私的な行為がもつ記憶に働きかけ、想像力を別の場所へと接続する回路となっていた。

瀬戸で展開されたセルマ&ソフィアン・ウィスィによる「ラアルーサ」プロジェクトの展示も心に残っている。日々の手仕事はときに疲弊を伴い、その繰り返しの身振りに意味を見出すことは難しい。けれどその反復を見つめていると、本来は、こうした日常的な行為がコミュニティを育てたのは、素朴な土の像が湛える柔らかなさと親しさである。

こうした作品が抱える身体的な感覚に触れるとき、私たちは「近さ」を感じる。それは、ある場所の惨禍と私の日常

が地続きであることを実感させてくれる一方で、問題をも自分の視点へ引き寄せすぎてしまう危うさも孕んでいる。展示空間の外には変わらぬ日常があるが、その中でも、別の痛みは語られている(瀬戸市のまちなかで見た富安由真《The Silence(Two Suns)》はまさにその状況を表現していた)。何か一つの正しさにすがりたくなるとき、その痛みのような実感覚を媒体に、想像力を働かせられないだろうか。灰と薔薇のあいまの、不安定さのなかで考え続ける。それはきっと芸術だからこそ可能な姿勢なのではないか。

林 いつみさん Izumi Hayashi
岐阜県現代陶芸美術館学芸員。最近の担当企画展に「伊藤慶二 祈・これから」(2025年)など。



国際芸術祭「あいち2025」展示風景 ミルナ・バーミア
《ビター・シングス:オレンジの名のもとに》2024
© 国際芸術祭「あいち」組織委員会 撮影:ToLoLo studio

国際芸術祭「あいち2025」

2025年9月13日(土)～11月30日(日)[79日間]
場所/愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなか

お知らせ Letter

年間スケジュールの
詳細はこちら



2026年度の愛知県美術館 展覧会スケジュール、決定!

春は「歌川国芳展 ― 奇才絵師の魔力」、夏はスウェーデン国立美術館の全面協力を受けた「スウェーデン 絵画 北欧の光、日常のかがやき」、秋はボストン美術館の日本美術コレクションの礎を築いた大コレクターの一人として知られる、ウィリアム・ビゲローの日本における事績をたどる「没後100年記念 ビゲロー 幻のコレクションと近代日本画の夜明け 日本美術に魅せられたボストン人」、冬は「セカイノコトワリ ― 私たちの時代の美術」です。来年度もコレクション展を含めて、さまざまなテーマで展示を行います。

© 愛知県芸術劇場2026 ※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。 ※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。 ※掲載内容は2026年2月17日(火)現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。 2026年3月1日号 Vol.127 発行・お問合せ/愛知県芸術劇場(公益財団法人 愛知県文化振興事業団) ☎052-955-5506 e-mail/mkt@aaf.or.jp(企画制作部) デザイン/神谷直広、高木若菜(株式会社Rand) 編集/村瀬実希(MAISONETTE Inc.) 印刷/長苗印刷



